

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：13902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19989

研究課題名（和文）古代日本語複合動詞の現代日本語への継承に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Study on the Inheritance of Ancient Japanese Compound Verbs into Modern Japanese

研究代表者

阿部 裕（Abe, Hiroshi）

愛知教育大学・教育学部・助教

研究者番号：60965482

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、他動詞「取る」を前項とする複合動詞の歴史の変遷について、「取り持つ」を中心に調査を行った。古代語における「取り持つ」は《物体を手にする意》と《政事を行う意》を有していたが、前者の意は歴史的に失われ、現代語では後者に由来すると思われる《人間関係などを仲介する意》を主に表す。調査の結果、この変化が完了したのは中世後期から近世期であることが判明した。これは先行研究において複合動詞の内部構造の変化が起こったとされる時期とほぼ一致することから、内部構造の変化と意味体系の変化が関連している可能性が示唆される。同様の結果が「取り持つ」以外の「取り+動詞」でも見られるのか、今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

動詞と動詞を直接的に結合させて新たな動詞（複合動詞）を生み出すという造語法は、世界的にも特に日本語において発達している。現代語の複合動詞は多くの研究が蓄積されてきた。しかしその一方、歴史的な複合動詞研究も少なくはないものの、未解明な部分が多く残されている。現代語の複合動詞体系は歴史的所産であるため、現代語複合動詞を知るにはその歴史の解明が重要である。本研究は、古代語の複合動詞がどのように現代語まで継承されているのかについて、「取る」を前項とする複合動詞を中心に考察したものであり、現代語の複合動詞体系がどのように成立してきたのかを知る一助となるものである。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the historical evolution of compound verbs containing the transitive verb “toru,” with a focus on the transitive verb “torimotsu.” In ancient Japanese, the word “torimotsu” had the meanings of “to take hold of an object” and “to conduct government affairs,” but the former meaning has been lost historically, and the modern Japanese mainly expresses the meaning of “to mediate human relations, etc.” which seems to have originated from the latter meaning. Research revealed that this change was completed in the late medieval and early modern periods. This is roughly in line with the period when changes in the internal structure of compound verbs are said to have occurred in previous studies, suggesting that changes in internal structure may be related to changes in the semantic system. It remains to be seen whether similar results can be seen with “tori + verb” other than “torimotsu”.

研究分野：日本語学

キーワード：複合動詞 日本語史 語彙

## 1. 研究開始当初の背景

二つの動詞を「動詞+動詞」の形で直接結びつける複合動詞は、欧米諸語にはほとんど観察されず、アジアの諸言語にはある程度共通して見られるという特徴がある。そして、日本語の複合動詞はその中でも特に多様であると言われる。複合動詞が発達していることは現代日本語の特色といえる。

このように複合動詞は日本語の特色であることから、国内外で多くの研究が行われてきている。歴史的研究としては、古代語における複合動詞の存否に関して1950年代から2010年代頃まで盛んに議論が行われてきた。現代語研究においては、複合動詞の構造分析や分類が盛んであった。近年においても、2010年代に国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」の中で主要な研究テーマのひとつとして扱われ、主に複合動詞内部構造の解明に関して大きな成果が得られている。

このプロジェクト終了後も各所で複合動詞研究は行われており、近年は日本語教育の分野もしくは中国語や韓国語との対照研究が盛んであることから、複合動詞が日本語学のみならず周辺の学問分野においても重要な研究対象となっていることが分かる。一方、複合動詞の歴史に関する研究はこのところ少なく、複合動詞の存否の議論が一段落して以降、やや停滞気味の感がある。現代語複合動詞は歴史的所産であるため、複合動詞が古代語から現代語に至るまでにどのような歴史をたどったのか、引き続き研究を蓄積していく必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、古代語において多数存在していた複合動詞が、現代語の複合動詞体系にどのように影響しているのかを明らかにすることである。現代語の複合動詞体系は歴史的所産であるが、どの時代の複合動詞がどの程度現代語に影響を与えているのか、その詳細は明らかになっていない。この点について解明するためには、古代語と現代語に共通する複合動詞の歴史の変遷の研究を蓄積していく必要がある。

この研究の独自性は、古代語と現代語のつながりを強く意識している点にある。従来の複合動詞史研究は、ある特定の時代の複合動詞を取り上げる共時的研究が主流であり、歴史的な変遷に注目した通時的研究は少ない。しかし、複合動詞の多様性という現代日本語の特色がどのように備わってきたのかについて検討するという目的を達成するためには、本研究のような通時的な視点が必須である。

## 3. 研究の方法

現代語の複合動詞は「複合動詞レキシコン」<https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>に収録されているものだけでも約2700あるため、そのすべてを研究対象とするのは現実的ではない。そのため、古代語から現代語への継承について検討するには、両時代に共通する複合動詞のうち、歴史的に注目すべき変化を経験した複合動詞を選ぶ必要がある。まずは本研究で対象とする具体的な複合動詞を選定したうえで、その古代語から現代語に至る歴史的変化について記述し、古代語の複合動詞が現代語の複合動詞にいかに関与しているのかを知る一助とする。

実際の研究方法としては、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を用いて時代ごとに大規模な検索を行う。そして、コーパスで得られた結果に基づき、各種校訂本文や影印本等を用いて用例の意味用法の詳細な検討を行っていく。同コーパスに収録されていない文献については、各種索引等を利用する。具体的には、中古(平安期)の和文資料と訓点資料、中世前期(鎌倉期)の説話集と軍記、中世後期(室町期)の狂言台本とキリシタン資料、近世(江戸期)前期の洒落本や浄瑠璃詞章、近世後期の小説類、近代(明治・大正期)の新聞・雑誌・小説などを用いる。

## 4. 研究成果

まず、いくつかの複合動詞の歴史の変遷について予備調査を実施し、他動詞「取る」を構成要素とする複合動詞(「取り上げる」「引き取る」など)を研究対象とする方針を固めた。その主な理由は、「取る」を構成要素とする複合動詞は両時代に多く見られること、「取る」を前部要素とする複合動詞も後部要素とする複合動詞も見られること、両時代で意味用法がほぼ同じものと異なるものがいずれも見られることである。中でも本研究で特に注目したのは「取り持つ」である。「取り持つ」は上代から現代語まで連綿と見られる複合動詞だが、意味用法の歴史的変化が大きいため、本研究の対象として適切と判断した。

「取り持つ」は古代語では《物体を手にする意》と《政事などを行う意》を有していたが、前者の意は歴史的に失われ、現代語では後者に由来すると思われる《人間関係などを仲介する意》を主に表す。調査の結果、この変化が完了したのは中世後期から近世期であること判明した。これは先行研究において複合動詞の内部構造の変化が起こったとされる時期とほぼ一致すること

から、内部構造の変化と意味体系の変化が関連している可能性が示唆される。

以上より、本研究の成果を改めてまとめると以下ようになる。まず、現代語の「取り持つ」は古代語から連綿と続くものだが、古代語から現代語に至るまでには《物体を手にする意》の消失と《人間関係などを仲介する意》の定着という二つの大きな変化があった。この変化が起こったと見られる中世後期から近世前期は、複合動詞の内部構造が変化した時期と近いことから、複合動詞の古代語から現代語への歴史的継承においては、内部構造の変化が重要な役割を果たしている可能性がある。

このような個別語史的複合動詞研究の蓄積は、古代語複合動詞と現代語複合動詞の関連を明らかにするうえで重要な一助となる。同様の結果が「取り持つ」以外の「取り+動詞」でも見られる可能性は十分にあり、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部裕
2. 発表標題 複合動詞「取り持つ」の歴史的変遷
3. 学会等名 名古屋言語研究会第199回例会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------